

V 第四の神のことば 「安息日を覚えて聖なるものとせよ」(1)

出エジプト 20:8~11、申命記 5:12~15

はじめに

十の神のことば、すなわち十戒の前半の終わりの第四戒に取り掛かる。前半は神と人との関係が扱われていることは前に述べた。言うまでもないことであるが後半の第五から第十には、人と人との関係が記されている。ここで、前半部分の主イエスによる要約を見ておこう。

「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』」(マルコ 12:29~30)。

ところで十の神のことば十戒は、前半の四つが、後半も含めた全体の三分の二の分量を占めている。しかも、その中で第四の神のことばである安息日規定が格別念入りに記されていることは、その重要性を表しているのであろう。

振り返って、第一から第三の神のことばは、この第四の神のことば、第四戒を守ることによって目的を果たすことが出来るからである。言い換えれば、神の民が神だけを神とし、偶像を拝まず、まことの神に正しく仕えようと心から願うならば、この第四の神のことばを守ること、すなわち安息日を聖別して礼拝を守ることが、何よりも優先しなければならないということである。

1. 神の契約と安息日

安息日規定は神によってモーセに与えられた。安息日はモーセの時以来イスラエルが守るようになったことに異論をはさむ余地はない。よくわからないともいえるが、創世記のアブラハム・イサク・ヤコブらの族長たちが安息日を守っていた痕跡は見出せない。これによって、安息日規定は、出エジプトの神の壮大な救出とかかわっていたことが明らかである。冒頭にあるように第四の神のことば(第四戒)は出エジプト記 20 章にない言葉が、申命記 5 章に記されている。

特に 15 節のことばに注目したい。「あなたは自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、【主】が力強い御手と伸ばされた御腕をもって、あなたをそこから導き出したことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、【主】は安息日を守るよう、あなたに命じたのである」(申命記 5:15)。

なぜ安息日を守らなければならないのか、ここに答えがある。神がエジプトからイスラエルを救い出されたということを、覚えているためである。神は律法を与えイスラエルとの契約を新たに追加された。その律法の要約が神の十のことばである。安息日を守るのは、神との契約をしるしづけるためである。

顧みれば、モーセ以前にイスラエルが安息日規定を守っていたという状況は想

像しえない。エジプトで奴隷のように重労働に従事させられていた時、イスラエルの民は安息日どころではなかったのである。律法授与以前に安息日を守っていたかもしれないと推測できる出来事が唯一記されている。それは出エジプト記 16 章 25～26 節にある。

「モーセは言った。『今日は、それを食べなさい。今日は【主】の安息だから。今日は、それを野で見つけることはできない。六日の間、それを集めなさい。しかし七日目の安息には、それはそこにはない』」。前日に二日分を与えられ、七日目は見つからなかった。つまり、土曜日にマナを与えられず、仕方なく休まざるを得なかったのである。しかしこれは例外というべきである。重ねて言う。出エジプトという民族救済の出来事の後に与えられた命令であった。

「あなたの聖なる安息を彼らに教え、あなたのしもべモーセを通して、命令と掟とみおしえを彼らに命じられました」（ネヘミヤ 9：14）。つまり、安息日が律法として公布されたのは、出エジプト後、異邦人との生活から分離されてイスラエル民族だけの生活が始まった直後であったことにも注目しよう（出エジプト 16 章参照）。

2. 七日目は主の安息の日

(1) 六日間の天地創造

「それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものとした」（出エジプト 20：11）。これは創造の週の要約である。この箇所は創造の期間を引き延ばすあらゆる試みの前に立ちはだかっている。我々は今も創造のはじめの週に基づいて、一日の休みを含む 1 週 7 日間のサイクルで生活している。十のことばは全て神ご自身のことばであることは、同じ 20 章 1 節に宣言されている。「それから神は次のすべてのことばを告げられた。」神（創造主）は 6 日で万物を創造され 7 日目になさっていた創造のみわざの完成を告げられ、休息の日とされた。しかし、神は万物の創造に 6 日間かける必要はなく、休息も必要ではない方である。

「あなたは知らないのか。聞いたことがないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造した方。疲れることなく、弱ることなく、その英知は測り知れない」（イザヤ 40：28）。

神による創造は最大の奇跡である。私どもはすでに神の救済の歴史を辿ってきたが、イスラエルの民とともに数々の奇跡を見てきたのである。ノアの時代の洪水の奇跡、モーセとヨシュアの時代の諸奇跡、すなわち出エジプトにおける奇跡、紅海の奇跡、シナイ山における律法賦与の奇跡、カナン侵入における奇跡など、またエリヤの時代の諸奇跡を思い起こす。

以上のような意味において、聖書における「奇跡」は単に人の目を驚かす摩訶不思議な業という性格のものではない。罪の結果に対する神の超自然的な関与による救済と結びついている。神の民は神の御業を信仰によって確信する。

「さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人たちは、この信仰によって称賛されました。信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、その結果、見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります」(ヘブル 11:1~3)。

(2) 安息日を守る第一の理由

① 安息日は創造の七日目

「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ」とは、一週間のうちの一日を区別して労働を中止し、その日を特別に神のために取っておきなさいと言うことである。それがどの日でもよいというのではなく、一週間のうちの〈七日目〉(10 節)と明確に定められているのである。七日のサイクルを持った週の概念と、七日目を安息日にすることが、当時の風習から決められたのではなく、主自らモーセに告げられたのである。安息日の起源を古代バビロンや当時の異教徒諸国の宗教文化の影響に求める試みは正確な根拠に乏しい。

要は、安息日は神(創造主)が自ら記された石板が根拠であり、創造の6日間と同じように第7日は同じ一日であったというべきである。つまり、現代と同じ通常の日であった。創世記1章で、ヘブル語のヨム(「日」という単語は通常の「日」を示している。標準的なヘブル語辞書は、創世記1章5節の日を「24時間の日」としている。「神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。」ここに書かれている「日」は、その日数の夕と朝のサイクル(夜と昼)で定義されているのである。ちなみに、創世記1章では、「日」は数字を添えて使われており、他の旧約聖書においても同様に410回も「日」が使われていると研究者は述べている。

ところで、しばしば「日」という単語は通常の日以外の意味で使われることがあることも承知している。前後のコンテキストによって違う意味で使われることもある。例えば、第二ペテロ3章8節に、「しかし、愛する人たち、あなたがたはこの一つのことを見落としてはいけません。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」ということばがある。この箇所は、文字通りの「日」という短い期間も、「千年」という長い期間も、永遠の創造主にとってはおなじであると言おうとしているのであって、「千年」=「一日」ということではない。これらの表現から、創世記1章の「日」の意味を長く解釈することには無理があるというほかない。

②最終的権威は特別啓示である聖書

こうしてみると、創造の一日を「長い年代」に解釈することは、聖書神学的に無理があり、聖書以上に「一般科学」に合わせようとする動機が根底にあることがうかがわれる。正直、私の若いころにそのような揺らぎがあったことを告白せざるを得ない。しかし、組織神学者ルイス・ベルコフのことばが大きな支えとなったのである。

少し長いのであるが次に引用する。玩味すべき言葉である。

「初めに神（創造主）が創造を通してご自身を明らかにされましたが、人間の罪によって最初の啓示が不明瞭になってしまいました。墮落後は、それだけでなく、世界全体が不完全なものになってしまったのです。ですから、今日では、創造主ご自身が聖書に特別啓示として与えられたことが最終権威と考えるべきでしょう。もし、創造主の知識を伝えるだけなら、それは純粹であって、間違いや迷信から解放されており、墮落した人間の霊的必要に答えます。もし誰かが、創造主の一般啓示について、第二の情報源として自然主義のみが聖書のみことばの中に解釈をはさむことができると考えて言及するなら、もはやそれは正しくありません。」

むすび

今回は六日の創造と安息日規定の時間的側面を述べてきた。安息日は7日目の一日24時間のすべてを、全体を通して神を礼拝することを求めている。その期待に応えて私が50年間仕えてきた岡山の西大寺キリスト教会では、早朝6時から午前中三回、午後7時からの一日四回の礼拝をささげてきた。主の日の一日中賛美と祈りに満ち溢れ、主のみことばが語られ、聖礼典にあずかり、主の民と主を求める人々が集うためである。

また、もう一つは宣教的目的のためでもある。さまざまな職域の方々のニーズや、学生たちの諸活動、家族・親族や地域社会の公的・私的行事によって礼拝出席が困難な時に、共に礼拝を守る機会をできるだけ提供したいと願ってのことである。99パーセント未伝地の非キリスト教社会の中で、キリスト教国の一日一回の礼拝スタイルを後生大事に守り続けているのは、教会の怠慢であるとのそしりを免れ得ないだろうと考えたからである。

一方、礼拝は生涯のすべての日においてささげるものである。「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です」（ローマ12：1）。この使徒パウロの教えは7日目だけに限定されていない広がりを持つ。それならば、なおさら主の日に教会はできるだけ門戸を開くことを喜んですべきであることを重ねて訴えたい。